

本学習会のテーマ

児童自らが学びの主体となるための「問い」を生み出す
単元・授業づくり

創造性の発揮に寄与する「学びのつながり」を意識した
単元・授業づくり

詳細は指導案にて。

本学習会における提言

1. 「興味のあるところを要約する」
のは何のためか。
2. 「紹介する」という言語活動と
説明的文章を読むことの本質
との関係性

結論

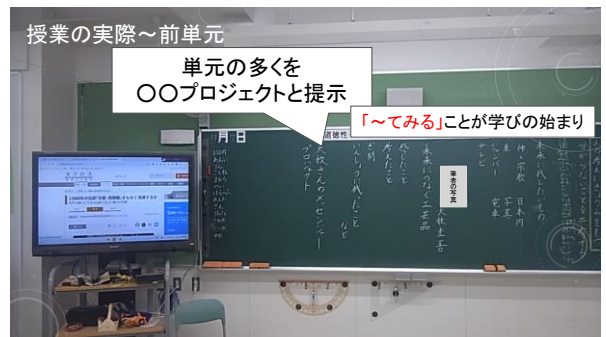
1. 「興味のあるところを要約する」のは何のためか。
- ・他者が目的意識をもたせるのは
困難。
 - ・行ったとて、自己評価の観点が
不明確。
→ここに問いは生まれない。

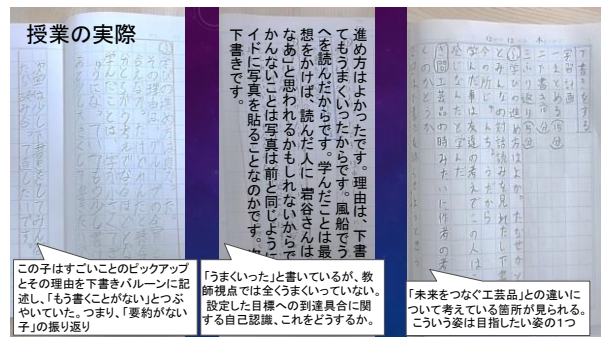
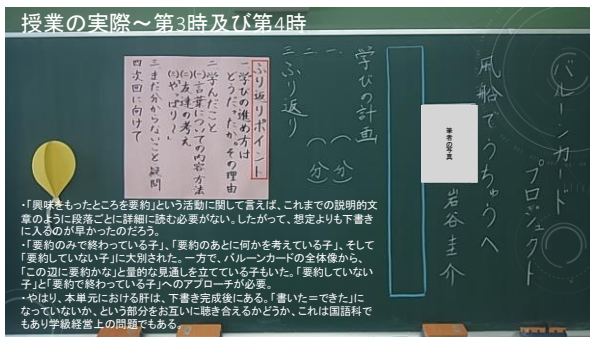
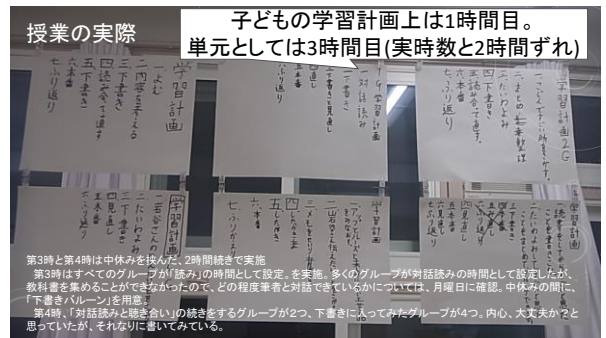
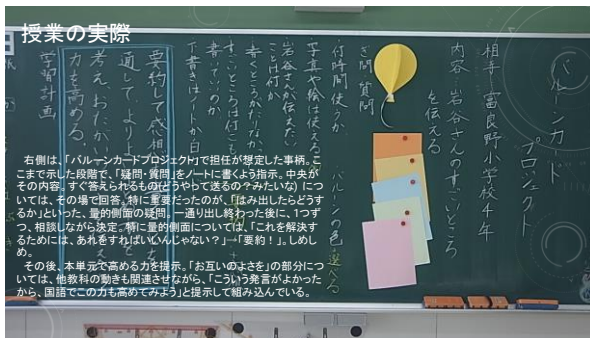
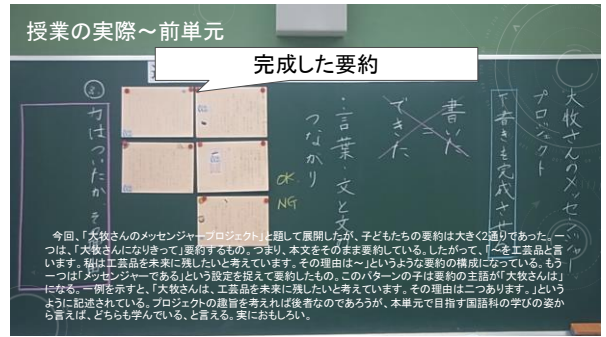
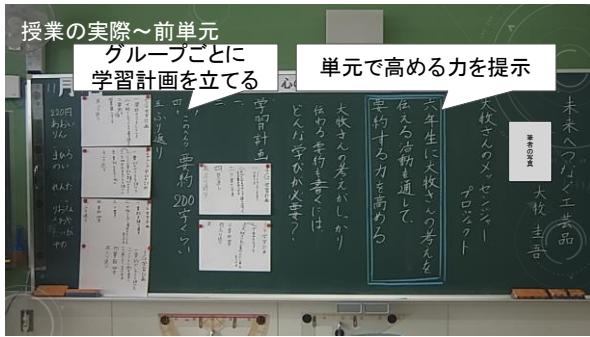
結論

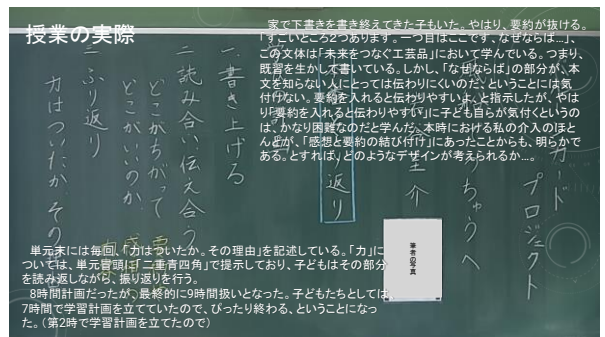
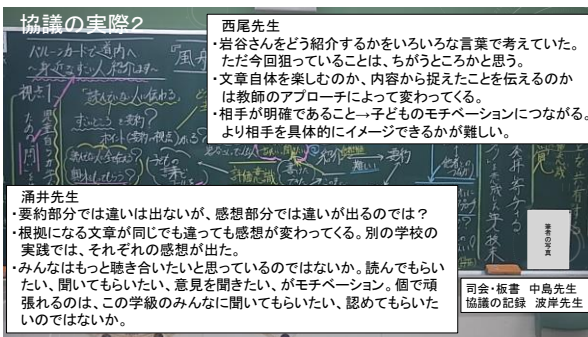
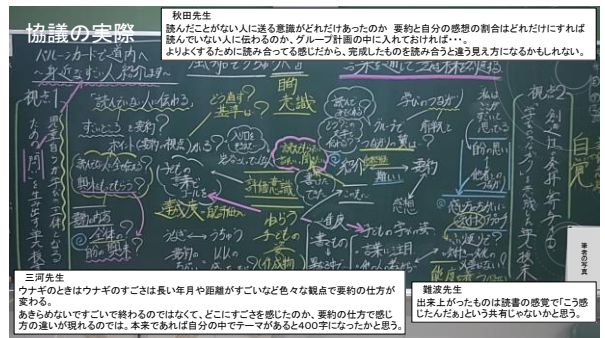
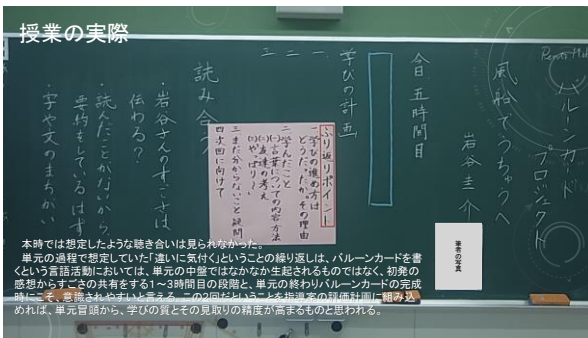
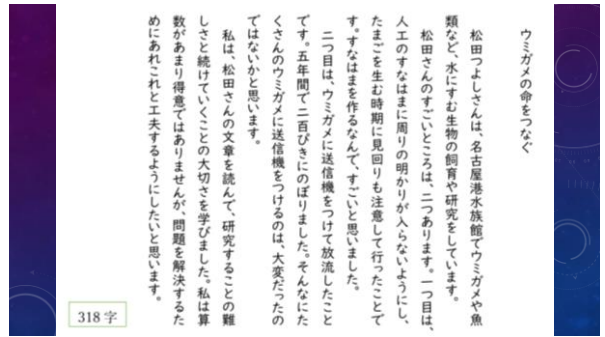
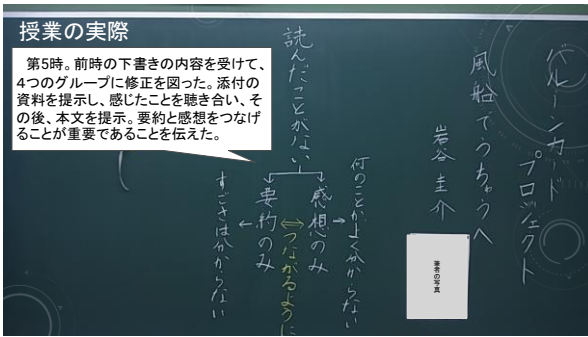
2. 「紹介する」という言語活動と説明的文章を読むことの本質
との関係性

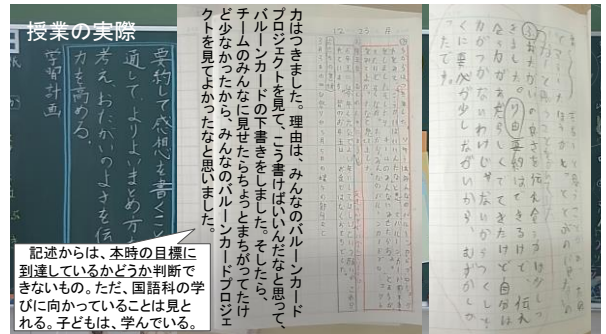
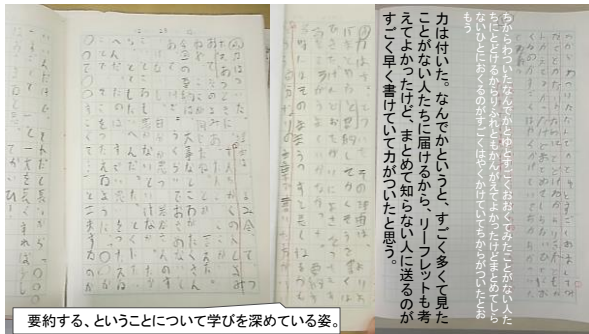
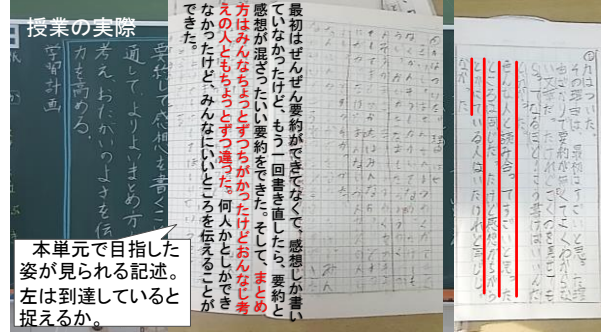
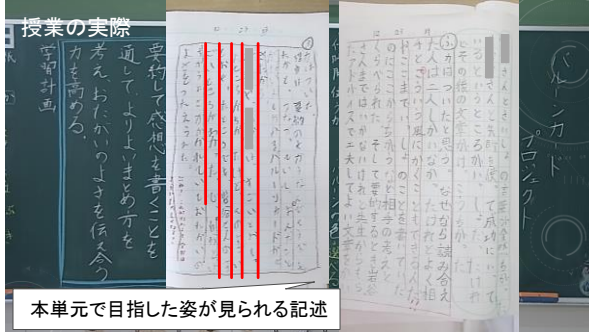
- ・「紹介」には、それに伴う活動が多い。
- ・「説明」の方が、子どもの思考に
寄り添いやすいと考える。

→いずれにしても、一人一人の感じ方の違いに
気付くという指導事項を、達成することは難しい









省察～考える必要がありそうなトピック

- 改めて本単元のデザインを考えてみると、「興味をもったところを中心に要約する」という活動を「読んだことのない人に内容を伝えるために、感想と結び付けた要約をする」と置き換えて展開している。それぞれの活動に必要感や相手意識をもてるよう組織した結果、複雑化した。
- この文章で伝わるか、という評価意識をいかに育むか。
- 「一人一人の感じ方に違いがあることに気付く」ために必要なアプローチの在り方。そもそも、この指導事項は説明的文章を読むことの本質とずれている、というのが私的見解。この指導事項の達成は、読書単元的な扱いによって、可能となるのではないか。

本学習会のテーマに沿って

児童自らが学びの主体となるための「問い」を生み出す
単元・授業づくり

- I 自ら問題発見・課題設定していく
→「プロジェクト」(＝活動内容)は提示していいと考える。
その枠組みの中で子どもが主体となるための問いが生まれる。
- II 他者の言葉・テキストから
→「これでよいのか」の意識を自発的にもてないといけないが、「興味をもったところの要約」「紹介」では難しい。
- III 自らの表現に対する
→この言葉でよいのか、という評価意識を育て続けなければならぬ。

本学習会のテーマに沿って

創造性の発揮に寄与する「学びのつながり」を意識した
単元・授業づくり

I 資質・能力ベースで捉えた単元・授業の構成の工夫

→「要約する」という資質・能力の活用、高まりは見られた。だが、
本単元で目標とした「一人一人の感じ方の違いに気付く」とい
う資質・能力の育成には別のアプローチがあるだろう。

II 身に付いた力の自覚を促す、評価の在り方

→「紹介すること」「一人一人の感じ方に違いがあることに気
付く」ことは方向性が違う。同様に「興味をもったところを要約
すること」「紹介すること」も直接には結びつかない。したがっ
て、本単元のデザインでは、力の自覚を促す評価が難しい。